

秋の、にをみなへし、みんとさしはへてぬれにしそでや花とみゆらん

右

をみなへし秋の、風にうちなびきこ、ろひとつを誰によすらん○中略

花は右をとり、歌は左かちけり、

萩花競

〔藤原相如集〕一品宮むめつぼのはぎの花くらべさせ給しに、

くらぶれどまさらざりけり花ながらこの宮城の、萩の下葉は

菊合

〔寛平菊合〕題菊

左方占手の菊は、殿上童に立君を、女につくりて、花におもてをかざさせてもたせたり、いま九本をば、すはまをつくりてぞしたる、そのすはまのさまは、思ひやるべし、面白き所の名をつつけつ、
きくにはゆひつけれたり、

占手 山城皆瀬菊

うちつけにみなせはにはひまされるはおる人がらか花のかげかも

二番 嵯峨大澤池菊

一もと、おもひしきくを大澤のいけのそこにもたれかうへけむ○下略

〔古今著聞集十九〕延喜十三年十月十三日御記云、仰侍臣令新菊花各十本分三番、相爭勝劣賭、以申

時各方領花參入一番入自仙花、二番入自瀧口次第進花立庭中一番種花以右洲形、二番栽火左衛門督藤原朝臣

候御前、傳作勝負總十番、勝方簾中拜舞、選進菊中各四本、栽西方小庭、十二月九日二番侍臣獻負柚

菊時貢物也、此袖於射庭、可獻、而貢獻違失也入夜出待賢門、左衛門督權中納言侍之飲酒

天曆七年十月十八日、殿上の侍臣左右をわかつて、をのく、殘菊を奉りけり、主上○上村清涼殿東

の孫庇南の第三間に出御、王卿東の簀子に候仰に云、延喜十三年侍臣獻菊、かの日只左衛門藤原